

喫茶店文艺



合併号

A rainy day is a special gift for readers.

Amy Miles

喫茶店文芸 2022年5月・6月合併号——目次

天野満

RUN RUN RUN 1

福原大輝

カンニング森 5

山中隆司

赤い荒野 11

天野満

天野日記その弐 15

RUN RUN RUN

天野満

Mitsuru Amano



らんらん、と歌いながら少年は走る。

空には雲ひとつなく、平原はどこまでも広がっている。

吹き抜ける風は少しも澱みを抱えておらず、少年のシャツの裾を軽快になびかせていた。

「よう、走るの楽しいか？」

一羽のカラスが少年に話しかけた。少年は走りながらコクリと頷く。

「それは良かった。お前さん、名前はなんていうんだい？」

少年はポカンとした表情で、カラスを見つめる。

「なんだ名前が無いのか。じゃあ今日からお前はニコだ。額に傷が二個あるしな」

カラスにはニコと名付けた少年の顔がパツと明るくなったように思えた。

「気に入ってくれたみたいで嬉しいよ。で、お前、走るの楽しいか？」

ニコは首を傾げた。

「あれ、これはもう聞いたかな？ すまんすまん。すぐに忘れちゃうんだよ」

ニコがクスツと笑ったのを見て、カラスは恥ずかしそうに続けた。

「物忘れが酷い代わりに空を飛べるんだぜ、俺」

ニコは走りながらびよんと跳ねて、すぐに地面に着地する。で、不思議そうにカラスを見た。

「お前は飛べないよ。だって人間だもの」

カラスがそう言っても、ニコはびよんびよん跳ねるのをやめな

かった。

やがて雨が降り出した。雨粒がニコの服を濡らして、細い体に張り付かせた。

「雨宿りできる場所を探そう」

カラスが提案すると、ニコはあたりをキョロキョロ見回した。よそ見たのがいけなかった。ニコは足をもつれさせてしまい、勢いよく転んだ。

「大丈夫か、ニコ」

カラスは飛ぶのをやめ、ニコのもとに降り立った。

「やっちまったな、ケガしてる」

ニコは転んだ拍子に膝を擦りむいて、真っ赤な血を流していた。自分のケガを見てもニコは泣いたりせず、ただ不思議そうに流れる血をじっと見つめていた。

「動けるか」

ニコは立ち上がったが、足に上手く力が入らず、よろけていた。

「ここで待ってろ、助けを呼んできてやるからな」

カラスは翼を羽ばたかせて、雨のなかを弾のようにとんで行った。

ニコは木の幹に背を預け、膝を抱える。木の枝からすり抜けてくる雨粒が、頭から足の先までニコをずぶ濡れにした。寒気に体をぶるっと震わせ、分厚い雲に覆われた空を見上げた。カラスの姿をどこにも見つけることはできなかった。

いつまで経っても雨は止まない。ニコは地面に横たわって重い咳をした。起き上がるのも困難なほどの発熱をしていた。膝の傷

が焼けるように痛んだ。いまだ、カラスは帰ってこなかった。

「これは、これは。いけない、いけない」

混濁した意識の中でニコはしわがれた声を聞いた。黒い服をまとったひよる長いノッポだった。ニコの何人分かというほど背が高かった。逆光で顔は見えない。

「こちらに、こちらに」

差し出された骨と皮だけの手をニコは握った。その手は死んだように冷たかった。

「お食べ、お食べ。たくさん、たくさん」

窓のない暗い部屋のベッドに横たわるニコの口元にノッポはスプーンを運んだ。人肌ほどに冷まされた乳粥をニコは力なく咀嚼する。

ノッポの顔がランプの灯りに照らされる。青ざめた皺だらけの皮膚が、落ち窪んだ眼窩と鷲鼻に引っかかっている、表情は全く読み取れなかった。

粥をニコに食べさせ終わると、ノッポは何も言わずに部屋の外へ出ていった。

ジメジメしたシートに包まれながらニコはカラスのことを考えた。カラスはまだ自分を探しているのではないか。そうだとしたらあの木の下に戻らなくてはいけないような気がした。カラスがいっまでも自分を探し続ける様子を想像すると胸が締め付けられ、気がついたら枕元が濡れていた。

膝に巻かれた包帯が解かれるころまで、ニコはその部屋から出ることなくベッドに寝て過ごした。ある日、ノッポのがニコを部

屋の外に連れ出した。

古い洋館の廊下には、赤い絨毯が敷かれ、見知らぬ肖像画が壁にかかっている。ノッポはニコと言葉を交わすこともなく、ドアを開けたり、階段を登ったり降ったりしてどこかを目指して歩き続けた。

やがて大きな大きな鉄のドアの前につくと、ノッポは懐から鍵束を取り出して、扉を開いた。

中は天井の高い大きな部屋で、天窓からは青白い月光が差し込んでおり、中央に石を切り出して作られた台がポツンと置かれていた。

その光景を見たとき、ニコは急に頭痛と酷い動悸を感じ、大量の冷や汗をかいた。

ノッポはニコを台の上に寝るように促す。しかし、ニコは首を振って、ノッポから離れる。途端、ノッポは獣じみた唸り声を上げながらニコを掴み、台に乗せて両の手足をベルトで拘束しようとした。ニコはジタバタして、ノッポを振り解こうとする。

「いけない、いけない。しずかに、しずかに」

ノッポは谷のように深い眼窩の奥で黄色く光る眼をギョロギョロさせる。

「にえ、にえ。にんげん、にんげん。こども、こども。うまい、うまい。うまい、うまい」

ノッポの口から垂れた生臭い涎がニコの顔に垂れる。ニコはノッポの顔面に頭突きを食らわせる。ノッポが怯んだ隙にニコは部屋の外を目指して駆け出す。ノッポがクモのごとく長い手足を使つて四つん這いで追いかける。

長い廊下を駆け抜け、ニコは通路の袋小路に行き当たってしまった。ノッポはもうすぐそこまで来ている。ニコは窓を見る。下に広がる断崖。叫びながら迫りくるノッポ。

ニコは覚悟を決める。あらん限りの力で助走をつけて、窓の外へ飛び出した。

遠ざかっていくノッポの姿、散らばるガラス片、宙に浮いた体。

ニコは、思い出した。

かつて自分があの館の中に幽閉されていたことを。館の一室にずらりと並べられたヒトの骨を。ある日、ノッポの目を盗んで逃げ出したことを。

館の外に初めて出たとき、どこまでも行ける気がしたことを。

気がつけば、走り出していた。

ただ、自由に、自由になりたかった。もう、怯えなくていいように。

すまん、遅くなった。

声を聞いた、気がした。

空を飛ぶ、黒い影の大量が自分にぶつかる。ニコが気を失う直前にみた最後の風景だった。

木からたれた朝露のしずくが顔にポトリとあたって、少年は目を覚ました。深い森の中だった。頭に痛みを感じて手で擦ると、乾いた血が手についた。

ここはどこだろう。どうしてこんなところにいるんだろう。わからない。

これからどうしようか。少年は立ち上がって大地を踏みしめる。足の裏から柔らかな草の感触が伝わってくる。深く息を吸い込むと、体に力がみなぎるような気がした。

かくして、少年は走りだす。らんらんらん、と歌って。

おや、あれは誰だろう。額に三つ傷のある少年の姿を、上空から一羽のガラスが見つけた。(了)

カンニング森

福原大輝

Dai'ki Fukuhara



「だから、俺はカンニングなんかしてねえんだよ！」

金髪を左半分刈り上げている男が身を乗り出してそう言ってきた。両耳にあいているピアス穴とこの態度を見る限り、犯人のその態度だった。

「落ち着いて、その時の状況を聞かせてくれる？」

対して、大石和哉のこの落ち着き払った態度は、刑事か弁護人のそれだった。

高辻修介は改めてカンニング犯（疑い）の顔をよく見たが全く思い出すことができなかった。どうやら彼らの中学のときの同級生らしい。高校は違って、再びこの大学で合流し、そのつながりで今回大石は助けを求められた。

大学の講義の試験でカンニングをしてしまうと、その学期に受講した講義すべての単位を失う。実質留年を決定づけるものとなる。その疑いを晴らすために、大石は相談に乗っている。

きつと中学のときは顔が全く違うのだろう。そもそも高辻は人の顔を覚えられる人間ではないから、中学の同級生の名前を一人も思い出せないような気がした。

大学の食堂の片隅で、大石とカンニング犯が向き合っている。

二人を知っている人からしたら異様な光景かもしれない。

「物理なんたら概論の中間テストで、ケチつけられたんだよ」

「物理学概論」

大石は静かに正した。おそらく学生便覧か何かで見たのだろう。

「そう、それ。で、なんかメモがそばにあったからって」

「何のメモ？」

「答えが書いてあるメモ、らしい。でもさ、俺がそのメモ見てわ

かるわけねえんだよ」

むしろ留年してしまえばいい、と高辻は思ってしまった。なるほどね、と大石は冷静である。

「先生は平谷教授だっけ？」

「名前はそんなんだった。もごもごうるさいおっさんだ」

もごもごとうるさいって両立できるものだろうか、と高辻は思った。

「先生はずっといたの？」

「いや、最初にテスト配って帰ってって、最後に戻ってきてそのときに、そのメモについて言ってきたやつがった」

「そのメモは隣の人の可能性があるんじゃない？」

カンニング犯はうつむいて、うなり声をあげた。その時を思い出しているのだろう。

「……気づいたら俺の問題用紙の上にあって、なんだこれって思ったときに見つかった」

「だったら隣の人の可能性もなくなはないか。メモは今どこにあるの？」

「先生が持って行った」

大石は腕を組んで考えた後、こう言った。

「先生に会ってみようと思うよ」

カンニング犯の方は「任せたぜ」とご満悦である。

そのとき彼の後ろから「カンニング森」とはやしたてる、彼と似た見た目をしている集団がいた。その集団らしく、ウェーイとおおっている。ちげえわばか、と彼も返す。

大石は聞きたいことはもうないのか、立ち上がろうとする。

「じゃあまた、思い出したとかあったら教えてね、森くん」
「お前までやめろよ」

カンニング犯はこわもての顔でにらみつけてきたが、大石のきよとした顔に合点がいったようだ。

「もう名前覚えていないか。俺は吉永だぜ」

大石は人の名前を覚えていたのだろう、と高辻は思っていただけに驚いた。大石も驚いている。

「でもさっき森って」

「この大学ではカンニングしたやつのことを『カンニング森』って呼んで馬鹿にするんだよ。……後で覚えてろよ、あいつらマジで」

カンニング森、という呼び方は一部の学部でよく使われているようだった。

大石と高辻の二人が所属する学部ではほとんどカンニング行為は行われなため知らなかったのだが、知り合いの筋をたどると、カンニングした人をそういじる文化があるようであった。大学らしいと言えばそうなのだが。

大石と高辻は、物理学概論の講義を担当する平谷教授のもとを訪ねていた。

その扉をノックすると、吉永の言っていた通りもごもごとした声が聞こえた。扉を開けると、校内は禁煙なのにもかかわらず、部屋にはタバコのおいが充満していた。壁はヤニのせい、黄色く染められている。二人とも思わず鼻をふさいだので、平谷は換気扇を慌ててつけた。

へへへと笑いながらうちわを仰ぐこのおやじは、非常にクセがありそうで、吉永が少し不憫に思えた。

空気の入替えが済んだと思ったのか平谷はうちわを置き、椅子をすすめる。

「カンニングした子についてだったね」

大石は事前にメールでやり取りしていたようだ。大石たちは平谷の向いに腰かける。

「そうです。その時の状況についてお聞きしたいなと思って」

なるほど、とききほどと打って変わって真面目腐った顔で平谷は話し始めたが、吉永の言っていることと違いなかった。そこで、大石は吉永からの話をする。

「吉永くん本人は、そのメモに見覚えがないし、正直見ても分かんかったと言っています」

「確かに、テストの内容としても理解していない回答だったな。けれども、不正行為を見逃すわけにはいかないね」

平谷は自身の不正には目をつぶり、きっぱりとそう言ったので、高辻は思わず部屋中を見渡した。大石が続ける。

「では、そのメモを見せていただくことはできますか」

「仕方ない」

と平谷は机に戻りその引き出しをあさり始めた。思ったより無造作に入れてあるようだ。

「これだ」

大石がそのメモを受け取り、高辻はそれをのぞき込んだ。

流体についての物理の方程式が書かれているようだった。その内容を高辻は勉強したことがなかったが、短い注釈はその理解を

補完しているような気がした。

これほど細かいことをあの吉永が書けるだろうか、高辻は疑問に感じた。

大石が声を上げたので高辻はもう一度メモを見た。その最後に、筆記体でMORIと書かれていたのだ。

「最近身近に、森という名前に聞き覚えはありますか」

大石は訊いたが、平谷は首を振った。

「いや、知らないね」

その指は机をたたき始め、タバコを欲する合図なのかと高辻は想像した。

あくる日、吉永から大石に連絡があった。先輩から聞いた話らしいが、同じように筆記体でMORIと書かれたメモがテスト中に見つかったことがあるようだった。

「まあ、筆記体って何か知らんけど」

吉永は電話口で語った。

大石がその話をしながら、広い校内を歩いている。そして、事務に行ってみようと思う、と唐突に言った。

「なぜ？ 前にも同じ事例があったか訊くのか？」

「それはよくないと思う」

「よくない？」

何もわかっていないんだけど、と大石らしくない前置きをした。

「森さんの存在をそこまで表に出さないほうがいい気がするんだよね」

「森さん？」

高辻の疑問符をそっちのけに、大石は事務室に入る。追う高辻は、学科の事務員に呼び止められてしまった。履修について事務側でミスがあったらしい。どうでもいいと言いは難かった。

その間、大石は帳簿のようなものを事務員から借り、眺めていた。その中を指さしながら、事務員に何か言って書き込む。その後大石が事務室を出ようとしたので、高辻は慌てて呼び止めた。すると、試験監督のバイトをすることにした、と大石は短く言った。

「試験監督？」

「事務室で申し込みできるんだよ」

「いや、そういう意味じゃなくて」

高辻の思考をよそに、大石は表情を引き締めている。

「考えていることが合っていれば、来週中には話せると思う」

大石が去って、事務員との会話が終わり、すぐさま高辻は大石が見ていた帳簿を開いた。講義ごとに試験監督が二、三人割り当てられている表があった。その中に「森」と名乗る同一人物が数多くいることに気が付いた。

茶色の講堂の正面にある大きなエントランスから人が次々と出てきては、階段を下りてくる。

高辻は大石に呼び出されて、講義棟の前で待っていた。遅れて大石が現れて、一言だけ言った。

「そろそろ森さんが来るよ」

疑問はすぐに飲み込むしかなかった。ちょうどエントランスを出た男に大石が近づいて行ったからだ。

「森さん！」

森と呼ばれた長身の男性はけだるげにこつちを見た後、片眉を上げた。立ち止まって待っているということは、大石のことを知っているようだった。

「このメモ、森さんが書いたんですよね？」

大石は、平谷先生から預かったメモを掲げた。森はそれを静かに受け取った。

「あと五分だけ待ってくれる？」

そうやって森は階段に腰かけ、受け取ったメモを見ながらため息をついた。

五分たつと、鐘が鳴り、周囲の学生たちは吸い込まれるようにエントランスへと入って行く。中には駆け出す人もいる。そしてあたりに人はいなくなった。

森は大石を見た。続けていい、ということだろう。

「あなたは過去にカンニング扱いされたんですよね」

森は大石をじっと見つめ、黙っている。大石は意に返さず続ける。

「手口はわかりませんが、周囲の人のせいでカンニング犯に仕立て上げられたのでしょうか。それで『カンニング森』という言葉が生まりました。あなたが学部生の間はそれですつと馬鹿にされてきたのではないかと思います」

森が黙って聞いているのは同意を表しているのだろうか。大石は続ける。

「大学院に入ると、馬鹿にしていた同級生たちも卒業して、人付き合いがほとんどなくなり、あなたが森という存在であることを

誰も知らなくなった。でも『カンニング森』という言葉は残り続けた」

大石の言葉は考えられてきたのか、とても滑らかだ。

「そこであなたは森という名前を有効活用しようと考えて、試験監督のバイトを始めました。そこで、自分が過去にされたことの仕返しをしようと考えた」

具体的には、と大石は言葉を続ける。

「明らかにテストの出来が悪い学部生にカンニングの証拠となるようなメモを与えます。きっと、見つかつてその学生が留年に追い込まれればいいと思ったんですよね。そしてその『カンニング森』という存在を印象付けることで、周囲から馬鹿にされるようにけしかけたわけです」

「仕返しのためにね」

ここでようやく森は口を開いた。フツと鼻で笑いながら、その手でメモを振った。

「この彼はどうなったの」

吉永のことを言っているのだろうか、と大石も気が付いた。

「彼は留年を免れました」

「あ、そう。あんなんで留年しないんだ」

森はメモを破り捨てた。

「その話、事務の人とかにしたの？」

大石はかぶりを振ったが、森はそれを見ていなかった。

「まあ関係ない。もうこの大学から出て行くから」

森が背を向けたその瞬間、息を切らし現れたのは、あのヤニカスの平谷だ。

走る勢いそのままに地面に手をついた。

「森くん！ すまなかった」

森は怪訝な顔で、平谷を見下ろし、次に大石の方を向いた。

「だれだよ、このおやじ」

「許してくれこの通り！」

平谷が足元にすぎるのを、森は振り払った。

「なんだよ！」

平谷は再び土下座の恰好をした。

「君をカンニング犯に仕立てたのは、このわたしだ！」

「はあ？」

一瞬森は目を剥いたが、知らねえよこんなやつ、と正門の方へと歩き始めた。

「すまない！」

平谷は繰り返し続けたが、森は振り返らなかった。

「このヤニカスはなんなんだ」

ようやく高辻は苦笑している大石に訊いた。

「平谷先生は前にもカンニング犯を捕まえた過去があつて、そのときのことを謝りたいらしい」

「え？ つまり、そのときのカンニング犯が森ってことか？」

「いや、先生は全く覚えていないんだ。だから本当のことはわからない。でも先生は罪滅ぼしになればと思つて名乗り出てくれたけど、思いのほか入り込んでいるね」

迷惑なことに、平谷は森の背中に対して、土下座で謝罪を繰り返している。

「いやいや、よく覚えていないやつのために、ここまでするか？」

高辻が言うと、大石は笑っている。

「タバコのことと聞いて詰めてみた」

それは脅しというものだ、と高辻は思った。

しかし、自分の不正を指摘されると、人はこうも態度を変えてしまうのか。情けない教授の姿に高辻はあきれ返った。

大石は携帯電話を耳に当てていた。

「もしもし、吉永くん。……うん、そっちに森さんが行った」

その後、短くうなずいて電話を切った大石に高辻は訊いた。

「吉永は今どこにいるんだ？」

「大学の正門にいる。他の『カンニング森』を連れて」

つまり、吉永たち、カンニング犯（疑い）が、森が歩いていく先で待っていることになる。

「それは……復讐なのか？」

「いや、感謝だ」

感謝、わからない高辻はただ繰り返し続けた。

「森さんはみんなを貶めようとしていたけど、そのみんなは、森さんを利用していたんだよ」

森さんのおかげで救われたんだよ、と大石はもう見えなくなつてしまった森の姿を見ているかのようにだった。

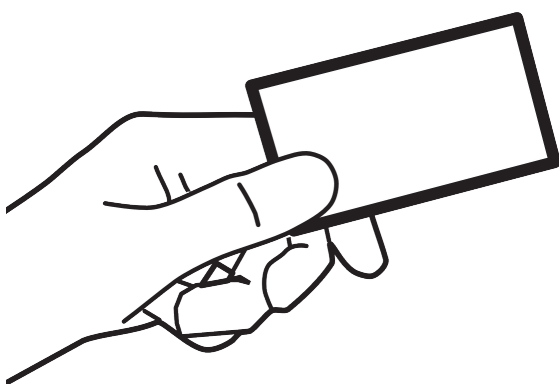
吉永も、カンニング犯に仕立てられたわけではなく、カンニング犯そのものだったわけだ。そして留年を免れた。大石への相談のとき、嘘をついていたわけだ。

正門前に並ぶ種々のカンニング犯たち。その拍手喝采の中を森が胸をそらせて歩いていく。カンニング犯たちがその恩師に感謝し、花道を作る光景は想像するだけで滑稽だった。

赤い荒野

山中隆司

Ryuuji Yamataka



行き先がわからないまま鉄道に乗ってどこかに向かっている。自分以外にもちらほらと見える乗客が手持ち無沙汰に外を眺めたり、飲み物を口にしたりしていた。外には植物一つない荒れ果てた土地が広がっている。明らかにここは日本ではない。

車掌が切符を拝見しますと声をかけてきたので切符を見せる。

「テフセレ行ですね。あそこはあと数十分ぐらいで着きますけど、奇岩と荒野が美しいだけで他に何も無い、あんなところで降りるなんてものの好きな人ですね」

そう車掌に言われると、なぜこのような切符を手に入れているか疑問に思った。単に覚えていないだけだろう。

「でしたら、テフセレの奇岩溪谷なんていいですよ。あそこに沈む夕陽を見るとちっほけな悩みはどうでもよくなります」僕の困った表情を見ていった。

車掌が出ていってから外を見ると確かにどこまでも赤い荒野が広がっていた。

——次は、テフセレ、テフセレに止まります。お出

口は右側です。——

そうアナウンスがあり、扉まで歩く際に男性と肩がぶつかる。

男性は早口で文句を言っているみたいだが、まるで何を言っているか分からず、慌てて頭を下げ列車を降りる。

駅を出ると先程の車掌のいっていたとおりやはり何も無く、眼前に広がるのは雄大な平原であった。

ここにきた目的はない。そもそも気付いたらテフセレ行の列車に乗っていた。ここにきた目的が分からない以上なるようにするしかないのが駅から道なりに歩く。いくら歩いてもあるのは岩ばかりで木陰一つなかった。

暑い。

喉も乾いた。そういえば朝から何も飲んでいない。このまま歩き続けられ倒れてしまう可能性が高い。わけも分からないところで行き倒れるなんてまっぴらゴメンだと思ったとき、遠くに平屋建てが見える。助かった。あそこで水をもらおう。

近くまで行くと女性が箒で吹き溜まりに溜まった砂埃を掃いていたので、心の中でガツツポーズをした。

「すいませんが、僕に水を少しだけ恵んでいただけませんか。今朝から何も飲んでいないので、喉カラカラで死にそうです」

だが目の前女性に警戒することも忘れなかった。彼女からすれば、僕は見知らぬ人間で盗賊かもしれないのだ。

この発言に一瞬驚いたような戸惑いがみられた。

「そんなことでよければ、大丈夫よ」

ニッコリと女性は笑う。その柔らかな顔に幾分こちらの警戒心も薄れた。

「それに多分だけれど、あなた今朝から何も食べてもいないでしょう。だったら軽食も作ってあげるから家においでよ」

と強引に家の中に連れて行かれる。外からみたところこの家は平屋にしてはかなり大きい。離れに小屋がいくつか見えるが、それもかなりの大きさであった。

「そういえば、あなたはどこからいらっしゃったのかしら。この

荒野を徒歩で抜けるにはかなりの軽装ですけど」

僕の着ている浴衣を見て言うので、テフセレ駅から来たことたえたる。

「あなた、テフセレ駅から歩いてきたの！ あの駅は三日に一本しか列車はこないけど泊まるところはあるのかしら？」

そんなこと言われても泊まるところなどあるわけがない。いきなり見知らぬ土地にいたのだから。

「あら、泊まるところもないのかしら。だったら家に泊まるというわ。夫にきいてみるからここで待ってて」

そう言い残して、部屋から出ていく。部屋の中で一人になった。部屋の中を見渡してみる。壁には家族で撮ったと思われる写真が何枚も飾られていた。見るに先程の女性を母とした五人家族なのだろう。

しばらくして先程の女性に連れられてガタイがいい男性が入ってきた。

「キミが、メイムが拾ったという少年か。なかなかいい男だな。まあ俺には敵わないがな」

そういつて男は豪快に笑う。

「そういえば名前を聞いてなかったな？」

「そう、ですね。私の名前はマツオ・ソウスケです」

「俺は、ケビン・クリストファー。このあたりで農園をやってる。そして隣にるのが俺のワイフの」

「メイム・クリストファーです。シヨ、ソ、ソウスケさんはどうしてこちらに」

ソウスケという名前が言いづらいのだろう。

「言いにくいのであれば、アンタとかでも構いませんよ。ここに来た理由ですか。それはさっぱりわかりません。気づいたらテフセレ行の列車に乗っていたんです」

うーん、とケビンさんは考え込んでいる。

十数秒、考え込んでから口を開いた。

「ただ、乗り間違えただけじゃないのか？ テフセレ駅は東西と北に向かって線路が伸びているから乗る列車を間違えたじゃないのか」

「それは違います。これを見てください」ポケットにしまった切符を取り出す。

「アンタの切符は確かにテフセレ行だな。切符なら発券した駅が書いてあるだろう」

いきなり見知らぬ土地に来て動転して気づかなかったが確かにそうだ。テフセレ行の横に書かれている文字を探す。しかし、発券した駅を記載すべきところには何も書かれていない。

「こりゃあ、アンタがどこか来た分かんねえな」ハハッとケビンが笑う。

「自分がどこから来たか分かりませんが、このあたりは奇岩溪谷が有名らしいのでそこに行ってみようと思います。それにここへ来て理由が分からない以上動かないと始まらないと思うんですよ」

「それには、俺たちも賛成だ」

ケビンさんはメイムさんを見る。メイムさんは何か言いたいことがあるような顔をしている。多分そんなことはないと考えているのだ。

「多分、自信はないですけど奇岩溪谷に行かなきゃならない気がするんです」

そういうと、しんとした気まずい空気があたりをつつみこんだ。まずいことを言ったか？

「そうだ。お茶にしない。アンタも喉乾いているんでしょ」

首を縦に降って同意を示す。メイムさんは部屋から出ていき、ケビンさんと二人きりになった。

「お前を見ていると、ケンカして出ていった弟を思い出すよ。今、どこで何をしているんだろ。出てったきり連絡も寄越さない」

暗に僕が家族に何も伝えず、驚くほど身軽な格好で旅をしていると思っているのだろう。多分、そうではない。しかし口から出た言葉は、そうかも知れないです。ねだった。

「アンタも、もし親と連絡する機会があつたら連絡して安心させてやれよ」

「確かにそうします」これが本心だった。

「アイツも。俺たちの息子のニックもそうだったら良かったがな。もし、見かけたら連絡を寄越すようにいつてくれないか」

そんなことをよそ者の自分に言われても困る。ああ、とかうん、とも聞こえる曖昧な返事を返す。

「アンタは、アイツのことを知らないもんな。変なことを言つてスマン。忘れてくれ」

ここでお茶を取りに行つたメイムさんが戻ってきた。お盆の上にはティーポットとサンドイッチがのせられていた。

サンドイッチを一口かじると口の中にパンに塗られたマスタードのピリツとした辛味とハムの塩味が口の中に広がる。続けて紅

茶にも口をつける。乾いた喉にぬるい飲み物はありがたい。

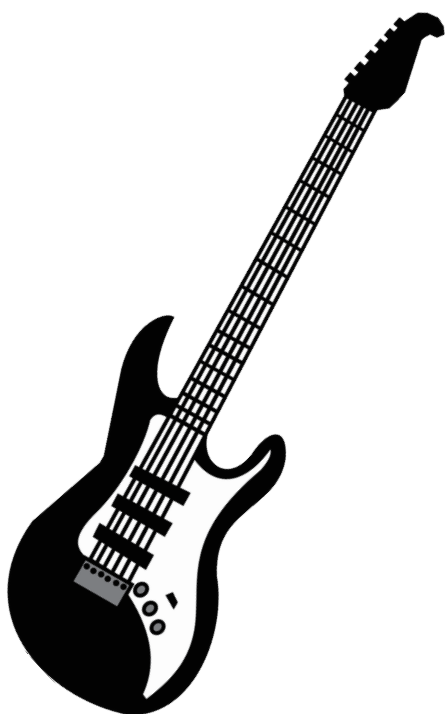
飲み物をもらつたらすぐに出発するつもりであつたが出ようとしたときにはすでに夕方、夜に荒野を歩くのは危ないとのこと。その日はここに泊めてもらい、ここが自分が暮らしている国に帰るには一月以上かかることが判明した。それに帰るために必要なお金を貯めなくてはいいけない。

翌朝、丁重にお礼を述べて奇岩溪谷に向けて歩き始める。夕方、奇岩溪谷につくとそこには自分とそっくりな人が夕陽に向かって倒れていた。

天野日記その式

天野満

Mitsuru Amano



○繰り返し見る夢

同じ夢を何度も見ている。不思議なことに同じ夢を何度も見ていると、夢の中で「これは夢だ」と気づいてしまうのだ。

どのような夢であったかという、私がテレビ番組に出演する夢である。

司会進行を務めるのは、かのダウンタウンである。ゲストにタレントのマリエ、解散したはずのお笑い芸人コンビのザブングル、女優の沢尻エリカ、他多数。人選の基準が良くわからないのである。

人選のみならず、番組の趣旨もよくわからないのであった。

ある時はレストラン、ある時はバー、他にもゲームセンター、山奥の工事現場、商店街といった具合に色々な場所を巡るのだが、珍妙な効果音が流れるやいなや、ゲストが次々に、唐突に脱落していくのである。

脱落には何かしらのルールがあるようなのだが、そのルールがわからず、ゲストたちも突然脱落させられて混乱していた。中には脱落が決まるや、ポロポロと涙を流す者もいる有様であった。

私といえば、ゲストたちが次の物件へ移動する間に、せせこましい本屋に立ち寄ったり、コンビニでタバコを吸ったりして、ろくすっぽ撮影に参加していないにも関わらず、一切脱落しないのであった。しかも、途中で得点システムが存在することに気がつくのだけれど、なぜか私は高得点を獲得していたのである。

ちなみに得点の一位は「弁天」という名の凄まじいオーラを放つ、美輪明宏のごとき風貌の芸能人であった。が、その弁天も唐突に脱落したりするのでびっくりしてしまう。

結局、何の脈絡もなく目が覚めてしまい、番組の行方は不明のままである。

なぜかこの夢を見たあとは目覚めがスッキリしているのだが、一日中「俺は夢の中でまだ脱落していないのだろうか」ということが気になって、仕事も手につかないのは困ったものである。

○バレル

かねてより、私は女装をしている。

主にバンドをやっているときに女装をするのだが、何となく、家族には内緒にしていた。

が、この間母親と弟に女装がバレた。

バンドの宣伝用に作ったインスタグラムのアカウントには、バンドメンバーの写真、いわゆる「アー写」が使われているのだが、その写真で私は女装していたのである。

どこから知ったのか、母親は私のバンドのインスタグラムのアカウントを知っており、フォローしており、写真を目撃していたのだ。

息子の、ええ歳をしたオッサンの息子が、仕事そっちのけで、嬉々として女装している姿を見たら、母親はショックを受けるのではないかと、私は若干ながら危惧していた。

けれど、母はひと言、ええやん、と言うてくれたのである。弟に至ってはゲラゲラ笑って「オモロ、オモロ、ツレに言ったら」と言っていた。

家族が寛容なのは、ありがたい話だなあ、と思いつつ、知らんところで情報が筒抜けの、SNS怖いー、とか思ったりして、鯉のように口をパクパクしたりするなど。

○ベース

私はバンドでエレキベースを演奏している。先日、新しいエレキベースを買った。

「東海楽器」という日本のメーカーのもので、中古で値段は六万円。私は生産台数の少ない左利き用の楽器を使うので、この値段帯で気に入ったものが手に入ったのは僥倖であった。

ところで、東海楽器は、小学生がよく使う楽器として有名な「ピアニカ」を開発した会社である。そのうち、卓越したものづくりの技術をバックボーンに、エレキギター、ベースの開発にも乗り出した。製品に関する世間の評判も概ね良いようで、海外のスタジオミュージシャンたちがこぞって東海楽器のギターやベースを買い集めていたこともあったらしいとか。

従業員に勤務時間外に楽器をつくることが奨励されているという話を聞いたことがあるが、そういった取り組みが高い技術力の背景なのかもしれない。世界初の新素材メタル・ボディ製のギター「Talbo」を作ったのも東海楽器であるし、楽器の製造方法の一部は、特許を取得しているものもあるそうだ。

東海楽器の製品を使う有名なミュージシャンとして、日本ではGLAYのHISASHI氏、平沢進氏が、海外ではキング・クリムゾンのロバート・フリップ氏が挙げられる。

私もすっかり東海楽器の魅力に惹かれた人間の一人である。今使っている東海楽器製のベースが再生不能の破損、盗難などにあった際は、東海楽器様に作ってもらえたらなあ、と考えている。可能であればだけでも。少なくとも金は貯めておこうと思う。もし、読者様、あるいは周りの方にギターとかベースを買い

たいとお考えの方がいらつしやれば、是非とも東海楽器を候補に入れるようにご進言いただきたい。個人的な経験の話だけれども、なぜか、楽器を買うときの候補に上がることが少ない気がするのです。

アイ・ラブ・東海楽器様。いい楽器を作って下さってありがとうございます。あ、東海楽器「シャツとかあったら買いたいです。無いですかね。

○また弁財天の歌が聞こえてきて

弁財天が私の枕元に座って、ビートルズの「レッド・イット・ビー」を歌っているという夢をみたことがある。

その歌声の美しさをどうにも忘れられず、自分の中に革命的な気持ちが湧き上がって、私はその夢を見た次の日に仕事を辞めることを会社に告げた。

半年後、退職の引き継ぎが終わってから、当時住んでいた愛知県を離れ、転職して大阪に引っ越し、バンド活動に、執筆に、とかく芸術的なものに一層熱を入れて過ごすようになった。忙しいけれど、かつて無い情熱を持って暮らせている。

弁財天を信じて良かった、と思っている。

でも、仕事選びだけは、革命的な気持ちに任せず、もう少しクルダウンして決めるべきであった。

働きだしてしばらく経って、内情に理解が深まるにつれ、現在の会社にいると今後確実に芸術活動に悪影響が出そうだなと考えたのである。あ、ちなみに、今の職場も選択して良かった部分も、もちろんあるから完全な間違いではないとは思う。それでも、大事に思うものを選び取っていかなくてはいけない。俺にとって大事なものは家族と友人と芸術だ。

過去に戻りたい、と思っても戻れないから、新しい道を模索することにした。俺のような自分勝手な人間は、企業側からすれば、本当にいい迷惑である。「申し訳ないなあ」という気持ちと「うるせえ、黙れ」という気持ちがルームシェアしているせいで心の中が毎日カオスである。

で、今、必死になって転職に必要な資格の勉強をしている。時

間も労力も不足しまくっている中でも、やることができたなら、やろうと思える困難なら、多分それは間違った道ではないはずだ。今度こそはうまくいくだろうか。「今とは違う方向に立ち向かっていく」ことができるだろうか。わからない。でも、もうここまで来たら破れかぶれだ。試せることは可能な限り全部試していきたい。何もやらずに立ち止まってすり減るよりは、たとえ逃げでも動きたい。

自分では初めての体験なのだが、この勉強している内容は複雑だし、かねてから興味あったわけでもなかったのだけれど、最近は何んとなく楽しいように感じている。

「もしかして、こんな風に勉強が楽しいと思える様になったのも、弁財天様のお計らい？」

ええ歳して頭に花が、変な匂いのする汚ったねえ花が、咲いている私を見て、弁財天も苦笑いしている。多分。(了)



HP URL

<http://literarycafe.wp.xdomain.jp/>